

# Digium社のマーク・スペンサー氏が講演 NTTソフトウェアとのパートナーシップを強化

NTTソフトウェアは、米Digium社のオープンソースIP-PBXソフトウェア「Asterisk Business Edition™」を搭載した、モバイルセントレックスソリューション「ProgOffice®」（プログオフィス）を昨年9月から提供している。その上でNTTソフトウェアはDigium社とのパートナーシップを強化し、相互のビジネス展開を拡大しようとしている。去る5月8日にDigium社のマーク・スペンサー氏が初来日し、Digium社の事業展開およびNTTソフトウェアとの協業体制についての講演が行われた。

### Asteriskの高付加価値を 一般に広く伝える講演

NTTソフトウェアは5月8日に、米Digium社のマーク・スペンサー氏を迎え「オープンソースIP-PBXソフトウェア『Asterisk』が生み出す新たな市場価値」と題して、同氏の来日記念セミナーを行った。

同セミナーの主な内容は、Digium社とNTTソフトウェアとの協力体制、スペンサー氏による「Asterisk

Business Edition」の全貌、Asterisk適用事例としての、NTTソフトウェアが提供しているモバイルセントレックスソリューション「ProgOffice」の紹介などである。本稿では、スペンサー氏の基調講演を中心に、セミナーの概要を紹介する。



セミナーの様子

## オープンソース分野でDigium社と協力

### Asteriskの進展に向けて コラボレーションを発揮

最初に、NTTソフトウェア IPサービス企画グループ グループ長の白石智氏が、Digium社とNTTソフトウェアとのパートナーシップについて講演を行った。

NTTソフトウェアは2006年8月に、AsteriskについてDigium社とのセキュアライセンス契約を締結した。これには、保守、サポートに関する内容、セキュアライセンスに関

係するさまざまな役割が含まれている。両社は双方で協力しあって、ビジネスを推進していく。

NTTソフトウェアは、オープンソース分野での技術力やNTTグループ会社との協力による営業および保守・管理体制の強みを活かし、ProgOfficeをはじめとする高信頼性の企業システムに、Asterisk Business Editionを積極的に活用し、同分野でのビジネス展開を強化することを述べた（スライド1参照）。

これに対してDigium社は、NTT

ソフトウェアとの強力なパートナーシップを通して、日本市場におけるAsterisk Business EditionおよびDigium社のプレゼンス向上を図っていく。白石氏は、NTTソフトウェアがオープンソース以外の技術力を高め、NTTグループとの協業などにより、Asterisk Business Editionをはじめとする高信頼性システムに積極的に取り組んでいくことについて語った（スライド2参照）。

NTTソフトウェアは2004年からIP-PBXを手がけ、翌年にかけてオープンソースによるPBXの検討をした結果、Asteriskの導入を決定し、



NTTソフトウェア株式会社  
IPサービス企画グループ  
グループ長  
白石 智氏

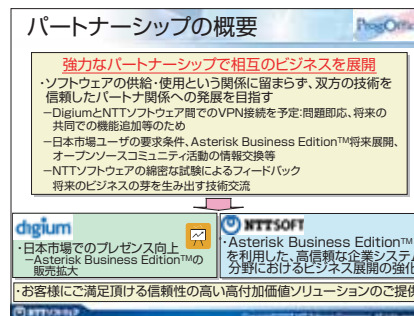
さらにその翌年には商品化開発に取り組み始めた。

白石氏は、NTTソフトウェアが Asterisk Business Edition を選択した理由として、広範なサービス機



スライド1

能や拡張性を持っていたことを指摘した。「そこでAsteriskの優れた点をNTTのコアコンピタンスに結びつけることが重要となってきます。高付加価値なソリューションとして市場に参入するために、研究所の技術をバックグラウンドとしたNTTの高信頼な技術とAsteriskを組み



スライド2

合わせることによって、企業の電話システムに対してキャリアレベルの信頼性を提供していきます。」と語った。

白石氏は高付加価値化の例として、NTTソフトウェアが提供するProgOfficeのSIPサーバの高信頼化などを挙げた。

## Asteriskのメリットを活かしたキャリア展開

### 柔軟性に優れ、経済的に活用できるのがAsteriskのメリット

続いて、オープンソース分野の開発技術の第一人者である、Digium

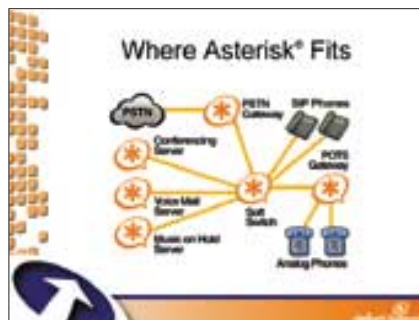


Digium, Inc  
CTO  
マーク・スペンサー氏

社のマーク・スペンサー氏が講演を行った。

スペンサー氏は初めに、Asteriskの歴史とオープンソースのメリットについて語った。

VoIPの代表的なソフトスイッチの環境の図を例に取り、Asteriskは、ソフトスイッチにもVoIPゲートウ



スライド3

エイにも、すべての場所に入ることを示した（スライド3参照）。

Asteriskはあらゆる電話関連の機能の特性を提供することを目的としている。スペンサー氏は、この目標がユーザーを含めた多くの技術者の協力で、順調に進んでいることに感謝することを述べた。

スペンサー氏がAsteriskの基となる部分を開発した時には、基本的なエンジンしかなかった。しかし、Digium社だけではなく多くの人がコミュニティ会議の場で意見を交換し合い、レビューと品質評価が繰り返されて高度化に繋がり、Asteriskの発展に大きく貢献した。

Asteriskのメリットとして、まず何よりも柔軟性が挙げられる。下位レイヤで数多くのインタフェースと

接続することができ、上部レイヤでもたくさんの新しいサービスをサポートすることができる。それだけでなく、今までになかったクリエイティブな新しいサービスまでもサポートすることができる。

この柔軟性により、例えば家の中で植物の水が足りなくなった時「水が足りない」ということをすばやく通知することができるシステムや、駐車時に電話で決済ができるシステム、自転車を漕ぐ時の労力を発電に利用し、電力を供給するシステムといったあらゆる分野のアプリケーションにAsteriskを利用できる。

また、Asteriskは非常に経済性に優れている。活用の幅が広いので開発コストを下げることができ、テクノロジーにアクセスするコストも下げることができる。また、Asteriskはソースコードを容易に修正・変更することが可能である。これによりお客さまへの選択肢が広がり、サービスのレベルも決定することができる。

「Digium社は、一体どのように収益を上げるかという点についてよく質問を受けますが、Asteriskによるビジネス、サービス、ソリューションによって収益を上げることができるというのが答えです。オープンソースとは差別化されたソフトウェア開発モデルであり、差別化されたソフトウェア配布モデルであると言えます。」とスペンサー氏は語っている。

企業やソフトウェア会社の配布モデルとして、従来は営業の人間がそのソフトを持ち寄り、機能説明をす



スライド4

るといった煩雑さがあった。これに対してオープンソースは、ソフトウェアをインターネット上で公開し、利用者は好きな時にダウンロードすることができる。あらゆる技術者は解決したい問題があるからこそソフトをダウンロードするのであり、プロダクトを販売するより非常にローコストで提供できる。

現在のAsterisk製品の中でも、企業向けに提供されているのがAsterisk Business Editionである。同製品は、伝統的なソフトウェアの形で提供することができ、テストやサポート、ドキュメンテーション、適切な認証などが含まれている。

### Linux 技術をPBXに応用することで独自の事業を展開

Digium社の歴史は、Linuxの事業から始まった。スペンサー氏は1999年、21歳の時にLinuxサポートサービスを開始した。Linuxの技術的なサポートを提供することが目的である。既存のPBXが高価だったため、独自のPBXを開発した。2000年になっても、Asteriskサポートが展開された。この時期には世界的にもAsteriskへの関心が高ま



スライド5

り、VoIPが有望視されるような環境が整ってきた。2000年にITバブルが収束すると、成長の兆しがなくなったかのように思われた。しかしその時期、企業が大手ベンダーのものを利用するよりも、安価なオープンなソフトが利用されるようになった。

スペンサー氏は「Asteriskは決まった業種や業態を選択するわけではなく、あらゆる業種や業態がAsteriskを選択できるのです。」と述べた。近年のニュースとしては、アートランの社長であったダニー・ウィングダム氏がCEOに就任し、200万以上のAsterisk製品を出荷したと発表している（スライド4参照）。Digium社は今回のNTTソフトウェアとの協業により、多くのモバイルセントレックス製品を提供していく意向である（スライド5）。

今回の両社におけるパートナーシップ強化に関してはスペンサー氏も期待しており、「ProgOfficeはAsteriskを活用した初のモバイルセントレックスソリューションであり、これから多く開発される共同開発製品の第一歩であると考えています。」と語った。

## 革新的なユビキタスオフィスを実現する ProgOffice



NTTソフトウェア(株)  
ユビキタスオフィス技術プロデューサー  
生駒 勝幸氏

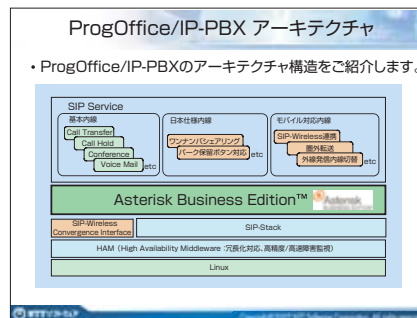
### Asterisk Business Edition の特長を適用した ProgOffice

NTTソフトウェア ユビキタスオフィス技術プロデューサーの生駒勝幸氏は、同社が提供している「ProgOffice」を紹介した。

まず、Asterisk Business EditionにおけるProgOfficeへの適用について語った。NTTソフトウェアとDigium社が協業したことにより、ProgOfficeはAsterisk Business Editionの特長・効果を適用して、短期間・高機能な製品化を実現している。

生駒氏は「Asterisk Business Editionの代表的な特徴として、①内線機能が豊富であること、②メディアサーバ機能を追加していること、③拡張エリアが充実していることなどがあり、これらの特徴を活かしてIP-PBXを構成しています。」と語った(スライド6参照)。

ProgOfficeは、SIPスタックレイ



スライド6

ヤを拡張し、SIPと無線LANの独自の機能によって安定運用させる機能を実装し、連携部分を局所化し、冗長化などの信頼性対策を考慮したものとなっている。Asterisk Business Editionにはアプリケーション実装のためのAPIが充実しているので、ProgOfficeはこのAPIを活用して、パーク保留ボタンなどの日本仕様の機能およびワンナンバーリングなどの独自内線機能を実装し、ソリューションの高度化を図っている。

またProgOfficeは、従来と同等の機能を提供するために、豊富なPBX機能をカバーしている。Asterisk Business Editionが多様な内線機能やメディアサーバ機能を保有しているので、これらの優れた性質をフルに活用して製品化を行っている。

さらに、Asterisk Business Editionが信頼性確保のために、高可用ミドルウェアとの親和性を保持しているため、ProgOfficeは冗長化や高負荷・長時間運転、音声品質・障害対策を実現できる。

加えて、お客さまが中長期間にわたって安定して利用できるように、NTTソフトウェアでは相応のサポート体制を敷いている。特にProgOfficeについては、Digium社とNTTソフトウェアの連携体制により、導入したお客さまに対して24時間365日の問い合わせ対応、現地への駆け付けによる保守対応などを用意している。

### 通話品質の課題を解決し 高接続性を確保

ProgOfficeには、さまざまなメリットがある。まず、NTTソフトウェアが独自開発した無線制御技術により、通話品質が向上し、通信路迂回による高度な通話環境を実現した。また、オープンソースソフトウェアの活用、汎用ハードウェアの採用、効率的な無線制御方式の採用などにより、大幅なコストの低減を実現した。さらに、NTT研究所で開発された高可用性技術が、SIPサーバに活かされているため、キャリア・グレードの信頼性を確保できた。製品内部仕様を把握することにより、お客さまの要望に合わせたカスタマイズが可能となり、マルチベンダ端末対応を実現した。

生駒氏は、「今後の展開として、ProgOfficeによりさらに導入しやすいモバイルセントレックス製品の提供を実現し、Digium社との協業で、システムに新たな高付加価値を提供することを目標にしています」と語り、講演を締めくくった。